

如水会寄附講義「社会実践論」講義要綱（2008年度夏学期）

講義責任者：山崎秀記

2008年4月15日（火）オリエンテーション

14時40分 東2号館 2201番教室

如水会寄附講義「社会実践論」では、産業界等、社会の第一線で活躍されている本学の12名の先輩の方々が、週1回ずつ（火曜4限）オムニバス方式による講義をされます。

皆さんが、将来の職業選択を軸に大学でこれから何を如何に学ぶかを考える指針となるように、現在第一線で活躍されている諸先輩に、「学生時代に何をしたか」、「社会に出てどういう転機があったか」等自らの体験を交えてお話しいただきます。講師の方々は、自分の歩んでこられた、そしていま歩んでおられるところから、社会を、日本を、あるいは世界を切り取って皆さんにわかりやすく提示し、皆さんが、現代社会とそこでの社会実践のあり方を個別具体的に考える機会を与えてくださることでしょう。

皆さんは、1回きりの講演をただ聞くというだけでなく、先輩の生き方や考え方にふれて触発されたものを質問や感想・意見として返し、ともに考え学ぶ場を作り出してください。

なお、本講義は、如水会および一橋大学の学問風土の活性化を目指して故永井正（22学）氏が寄附された基金をもとに運営されている一橋大学後援会「キャプテン・オブ・インダストリーを考える委員会」からの資金提供によって運営されています。

講義日程

第1回 4月22日（火）



テーマ：「一橋の精神と風土」

講師：大澤俊夫 東京商科大学・昭和27年卒
元NECリース（株）会長

講義内容

一橋大学は、明治8年（1875年）に、私塾商法講習所として、生まれてより133年の歴史を経て、今日の我が国屈指の社会科学の総合大学に発展するまでに至った。しかしその道程は平坦なものではなかった。数回にわたる学園存亡の危機があったが、その都度全学が一致して闘い、克服してきた。しかもその間、常に本学は、我が国の経済社会の近代化の先駆者として、学問と実践の両面にわたって有為な人材を輩出してきた。このような本学の活力を産み出してきたものは何であったのか、その「精神と風土」について語り、併せて、本学の建学の精神を体現する言葉「キャプテンズ・オブ・インダストリー」の現代的意義について言及したい。

第2回 5月13日（火）



テーマ：「優れた経営・優れた経営者
～私が経営コンサルティングの現場で学んだこと～」

講師：丸山弘昭 経済学部・昭和43年卒
商学部 昭和45年卒
アタックスグループ 代表パートナー
公認会計士 税理士

講義内容

私は大学卒業にあたり職業選択で悩み、いったん決まった大手銀行への就職を断念して公認会計士の道を選んだ。そして、現在では経営コンサルティングファームの代表者として、多くの優秀な中堅企業・ベンチャー企業の経営者と一緒に仕事をする機会に恵まれている。その中で、彼らから優れた経営のコツを学んでいる。

本講義では私が仕事の現場で学んだ優れた経営、優れた経営者について話をするとともに、私自身がコンサルタントとして、また経営者として何を大切にしているのかについても触れたい。

学生諸君にとっても、一代で立派な事業に育て上げたオーナー経営者、あるいは時流に乗って成功したベンチャー経営者の経営手法、人材育成法、成功哲学などは研究対象としておもしろいだけでなく、これからの人生設計をする上で参考になると考える。

第3回 5月20日(火)



テーマ：「業界再編と投資銀行の役割」

講師：朱 殷卿 法学部・昭和61年卒

メリルリンチ日本証券株式会社

マネージングディレクター・金融法人グループチェアマン

講義内容

大学卒業後から外資系投資銀行に就職して以来22年間、日本の金融業界を担当し、数多くの業界再編及び資本調達案件に関わってきました。業界再編が起きる理由、そこでの経営者の使命、そして経営者の意思決定プロセスにおける投資銀行の役割について議論することで、日本の産業界が今日直面している課題について考えたいと思います。さらに、国際的な投資銀行で働くことで学び感じてきたこと、具体的には、大きな組織で働くことの意義、その中でも個人としての尊厳と矜持を失わずに働くために大切なこと、そして企業が社会的に尊敬されるために必要なことはどういったものなのか、個人的な経験と認識の範囲内でしかありませんが、意見交換ができればと考えています。

第4回 5月27日(火)



テーマ：「上司、同僚、部下がインド人 - 2050年の日本とインド」

講師：安藤 穰 経済学部・平成11年卒

インフォシス テクノロジーズ リミテッド(インドのITコンサルティング会社)

アジア太平洋部門 日本担当マーケティングマネージャー

講義内容

皆さんがまだ中学生であったころ、私達にとっては衝撃的なレポート「Dreaming With BRICs: The Path to 2050」がゴールドマン サックス証券から発表されました。

このレポート中では2039年までにBRICsのGDPの合計が、アメリカ、日本、ドイツ、イギリス、フランス、イタリアのGDP合計を上回り、さらに2050年には、GDPの順位が、中国、アメリカ、インド、日本、ブラジル、ロシア、イギリスの順になると予想しています。ここでいうBRICsとは、ブラジル・ロシア・インド・中国の4カ国を示します。この4カ国の中で経済成長率が2050年まで5%を維持するのはインドのみ。

そんなインドという国に魅せられ、米系ITコンサルティング会社から劇的な成長を続けるインドIT企業へ東京支店日本人採用第一号として転職した私より日本のIT業界構造、インドIT躍進の秘密をお話しさせていただきます。

自分の出身大学名が全く通用しない世界で仕事をするということ、外国人と働くということ、インド人と働くということ、そして海外に目を向けている内にいつのまにか日本が世界で一番素晴らしいと再認識してしまったことを含めて、フレッシュマンの皆様の五感を刺激する90分とさせていただきます。

第5回 6月3日(火)



テーマ：「演劇との遭遇、忘れられぬ青春」

講師：久米 明 東京商科大学・昭和24年卒

俳優

講義内容

青春時代は戦争とともにあった。そして敗戦 学業半ばにして出陣した仲間、生きて学園に戻り、再び平静に学業に励んだ。だが、しそこなった者もいた。

戦争ボケの連中だ。僕もその一人、身心ともに栄養失調症だった。たまたま演劇に巡り合い、身も心も奮い立った。魂がふるえた。学内に劇研を立ち上げ、戦後初の学内公演を行った。その魔力は更なる飛躍をそそのかし、学外に出て芝居に走った。が、プロ劇団に入る気はなかった。純粋に芝居に没頭したかった。

「夕鶴」の舞台が世に認められ、NHKに出演して、プロとなった。間もなく民間放送がはじまり、テレビ時代が到来した。仕事分野はひろがった。この道60年、その原点は一橋にある。その歩みを振り返り、演劇の世界を語りたい。

第6回 6月10日(火)



江藤洋一



岡部明代

テーマ：「新人弁護士の就職状況について」

講師：江藤洋一 経済学部・昭和49年卒
インテグラル法律事務所 弁護士
岡部明代 法学部・昭和51年卒
株式会社 富士誇 顧問

講義内容

司法試験とは“日本で一番難しい資格試験”と言われていたが、昨今はその資格を取得しても、就職先が無い！という信じられない現象が起きている。新司法試験制度の導入等により、司法試験合格者数は増えているが、多くの弁護士の就職先である法律事務所の受け入れ態勢が従前とあまり変わらないからである。一方企業では、法務・コンプライアンスの強化やビジネスのグローバル化に伴い弁護士を必要としつつあるが、実務経験の無い新人弁護士の採用には消極的である。

このような現実を知った上で、弁護士資格を目指す明瞭な目的を持っていないと、司法試験合格後に就職活動で苦労する、ということもあるのである。

以上のような現状と最近の弁護士業務の内容などについて、長く弁護士として活躍され、また司法修習所の教官も務められた江藤弁護士と、昨年新人弁護士を企業に就職紹介した岡部との対話形式を交え、お話ししていきたいと考えています。

第7回 6月17日(火)



テーマ：「働く中での転機」

講師：肥塚見春 社会学部・昭和54年度卒業
株式会社 高島屋 広報・IR室長 執行役員

講義内容

働きたい、女であることが損にならない職場で働きたいという単純な理由で、高島屋で働くこととなり、30年近くが経とうとしています。少子化・高齢化が進み、業界再編をはじめとする外部環境の変化の中で、百貨店も生き残りかけた競争時代に入っています。私は入社してから、ここに至るまで、色々な経験を積み、振り返れば、あれが、私の転機だったと思うことがあります。私の転機とその時代の高島屋をお話ししたいと考えています。

第8回 6月24日(火)



テーマ：「21世紀市民社会に役立つ人材」

講師：高橋 宏 商学部・昭和31年卒
公立大学法人 首都大学東京 理事長

講義内容

1. 現在、日本も世界も大きな壁 歴史的な転換期に遭遇している。
2. 問題は大きく分けて三つ。
地球環境の崩壊
絶え間ない戦争と地域紛争。どうして人類は平和共存出来ないのか？
世界同時不況の進行
これらは全て、人間の叡智の欠如から来た人災だ。
3. このような時代に大学の果たすべき使命は、高い理念をかかげつつも「21世紀市民社会に役立つ人材」を少数精鋭で養成して社会に送り出すことだ。
4. 四年前、都立の四大学を統合し、徹底的な改革に取り組んで悪戦苦闘した講師本人の体験を語る。

第9回 7月1日(火)



テーマ：「プロジェクトに挑む——XBRLと私」

講師：和田芳明 経済学部・昭和57年卒

日本銀行 金融機構局 金融データ管理担当総括企画役

講義内容

私は、大学を卒業後、日本銀行に入行し、以来、中央銀行マンとして歩んできました。この間、バブルの生成と崩壊という、我国金融システムの激変期に関わると共に、ここ数年は、次世代の情報伝達技術であるXBRLの導入プロジェクトにも取り組んできました。思い返しますと、このプロジェクトは、私にとって中央銀行マンとしての総仕上げの意味を持つと同時に、今までのあらゆる経験はこの取り組みのためにあったのではないかと感じております。この講義では、私がどのように中央銀行マンの道を歩んだのか、未到の技術フロンティアに取り組むに至った道程はどのようなものだったのか、等についてお話ししたいと思います。社会では、皆さんもいつか困難な「プロジェクト」にも取り組んでいかなければなりません。私の経験が少しでもお役に立てば、と考えております。

第10回 7月8日(火)



テーマ：「働くこと」をめぐる諸問題

講師：逢見直人 社会学部・昭和51年卒

日本労働組合総連合会(連合) 副事務局長

講義内容

私は、労働問題をライフワークとした職業を選択したいと考えていましたが、具体的なイメージを描けないまま4年の12月になってしまいました。年の暮れに、ゼミナール指導教官である津田眞激先生のご自宅を訪問した時に、「ある労働組合から書記を採用したいと言っているがどうか」という話があり、私の気持ちが動きました。民間の産業別労働組合の1つであるゼンセン同盟(現UIゼンセン同盟)に就職し、現在に至るまで、政策を中心に労働組合の活動に関わっています。労働組合というと、「赤旗を掲げ、ストライキやデモをする集団」というイメージを持っているかも知れませんが、労働組合が取り組む活動領域は幅広いものがあります。皆さんがこれからどのような職業人生を歩むにしても、「働くこと」をめぐるいろいろな問題に直面することでしょう。「労働」は人生そのものです。講義では、私が労働組合の仕事や活動を通じて、感じたり、考えてきたことを中心に「働くこと」について話したいと思います。

第11回 7月15日(火)



テーマ：「石の上にも三年～重工業メーカーのものづくり・人づくり～」

講師：渡辺玲子 経済学部・平成4年卒

三菱重工業株式会社 人事部制度企画グループ主任

講義内容

陸・海・空、そして宇宙へ。700種類に及ぶ製品を展開する重工業メーカーの使命は「ものづくり」に尽きる。私自身、「石の上にも三年」といわれて社会へ送り出されてから、広い工場を無我夢中で走り回る中で、製造現場を肌で感じ、各職場のキーマンと交流し、漸く三年経ったときに「ものづくりに参加している」実感を得ることができた。以来十数年、ものづくりを担う「人材」をつくるため、採用や教育、人事制度の構築・運営に取り組んできた。メーカー人事部門での経験から、時に逆風にあっても、「石の上にも三年」の気持ちで働くことで、大きな組織における自分の役割や仕事の面白さが見えてくることをお伝えしたい。

第12回 7月22日(火)



テーマ：「家業を継ぐ」

講師：古市晴比彦 商学部・昭和57年卒

株式会社 東陽園 代表取締役

講義内容

一つの笑い話があります。会社で上司が新入社員に、「あそこの店に行ってお茶を買ってきて」と言いました。しばらくするとその新入社員は手ぶらで帰ってきて、「お茶、売ってませんでしたよ」と言いました。売っていたのはお茶の原料だったそうです。

私は現在、お茶の茶葉を販売する会社を経営しています。お茶屋の長男に生まれ、学卒後食品会社にて8年間の勤務の後、既定のレールに乗って迷うことなく家業に入り18年が経過しました。その間の会社を取り巻く社会情勢の変化は決して楽なものではなく、悪戦苦闘の連続といっても過言ではありませんでした。そんな中、自分の心の拠り所としてきたものは何だったか。家業を継ぐことの意味についてお話ししたいと思います。